2019年度前期　文学 学生・教員懇談会　　議事録

日時：2019年6月20日（木）12：10～13:30
会場：法政経第1会議室
参加者：各コースの学生、および学部長・各コース長・学生委員長・教務委員長・学生委員等の教員、学務グループ事務担当者

学生委員長の司会のもと、コースごとに学生側から要望・意見を出し、それに対してテーマ別に教員・学務係側が回答する形で議事が進行した。 以下に要旨を記す。

【設備について】
印刷室
意見：リソグラフが詰まりやすい。混んでいることが多い。（歴史学コース）
回答：黒い面が多いとインクがくっついて詰まりやすくなることがある。付着がある時も詰まるので、注意しながら使用してほしい。
授業直前は混むので早めに来て準備してほしい。
意見：印刷室で、授業資料を印刷する際のリソグラフ・コピー機の使用について、ルールが明確でない。（歴史学コース）
回答：現時点で、学生の個人使用はできません。リソグラフを使用する場合は事務窓口に使途を申し出てカードを借り出してください。
＜追記＞コピー枚数によっては、必ずしもリソグラフの使用が最適とは限りません。事前に教員とよく話し合い、教員のコピーカードを使用するのかリソグラフを使用するのか打ち合わせてから利用してください。
エアコン
意見：エアコンの効きが悪い。特に206教室が寒い。（歴史学コース）
回答：予算の関係から優先順位をつけて新しくしているが、206については留意する。
トイレ
意見：文学部のトイレは他と比べて古い。
回答：要望は聞いているが、まだ和式のところなどもあり、順次改修していく予定である。

【カリキュラムについて】
意見：隔年開講であることを知らず次年度履修しようと思ったら開講されてい

なくて困った。隔年開講の授業は前もって分かるようにしてほしい。（国際言語文化学コース）

回答：隔年開講だけでなく、不定期開講のものもあるので、シラバスに明記し、ガイダンス等でもしっかりと説明するようにする。

意見：同じ言語の専門の先生が二人しかいないのに同時間帯に授業があり、片方しか履修できなくて困った。（国際）

回答：いずれの分野でも教員間で時間割の調整をしているが、今回はできていなかったところがあった。今後そのようなことがないように、時間割作成の際に注意喚起する。

意見：国際言語文化学コース内ガイドラインの「専門外国語」について（国際）

国際言語文化学コースでは、１年生のガイダンスで、**「専門で使用する外国語（専門外国語と呼ぶ）を８単位以上と、その他の外国語１言語を４単位以上、合わせて１２単位以上を２年次末までに履修すること」という指導があった。**

実際に履修する際、「ロシア文化論」の講義は、講義タイトルから語学ではないと推測していたが、後から、ロシア語の授業に含めることができると言われた。前もって分かるとよかった。

回答：今年度、ロシア語は新任教員１名しかいないため、授業数や内容が例年とは異なる状況があり、そのような対応になり、分かりにくく申し訳なかった。他方、コースの教員が減少していく中、コースでの外国語授業の開講は大変厳しい状況にあり、学生も履修計画作成に苦労している。この点についてコース会議で話し合い、上記のコース内ガイドラインは廃止することを決定し、学生に伝えた。

今後は、文学部内の科目だけでなく、普遍教育の外国語等も含めて履修計画を立て、外国語の修得を目指してほしい。

【教育体制について】

意見：日本ユーラシア・コースの名称について（日本ユーラシア）

ユーラシアのことが勉強できない。

名称変更を考えるべきではないか。

回答：質問者退去のため懇談会上では即答は差し控えたが、改めて回答すれば以下の通り：

「ユーラシア」という用語は、わが国の学術機関を中心に特に文化・歴史関連分野において、慣例的に旧ソ連や内陸アジアを中心とした諸地域を指すものとして使用されている。

当コースではまさにそのような意味で用いており学術的に問題はないが、学生に向けての当コース HP における教育方針・範囲についての説明は、その点において不明瞭であった。現在では今回の意見を受けて修正済みである。

意見：ＨＰの説明について　（国際）

専修の説明を、高校生にも分かるように、もう少し分かりやすく具体的に書いてほしい。

回答：専修に伝え、検討する。

意見：教員の数が減ってきて、学びたいものが学べなくなってきている。（国際）

（歴史学コースでも同様の意見が出ていたと教員から補足があった）

入学後に、教員が退職後補充されないことが分かり、ショックを受けた。入学前に知らせるべき

回答：退職予定の教員はＨＰ等に載せるようにする。

オープンキャンパスでの情報の伝え方について配慮する。

意見：専門の勉強が続けられるように、改善策について、具体的に提示してほしい。指導教員が退職するため不安である。（国際）

回答：教員の補充については、必要性・緊急性を訴えて本部に要求していく。

・コース内では、各教員が専門分野の幅を広げつつ連携し、非常勤講師とも連絡をとりあって指導体制をつくっていく。

・指導教員退職の際は、引継ぎの教員と話し合いをきちんと行い、学生に不安がないようにケアする。また、退職後もアドヴァイス等を行うことは可能である。

・各教員が、他コースや他学部にどのような研究者がいるか、どのような授業が開講されているかについても把握して、学生に積極的にアドヴァイスしていく。

・他学部・他コースの専門科目を自コースの専門科目として履修しやすくする。

他学部・他コースの専門科目を自コースの門科目として認める単位数は、現在は 6 単位だが、**改定して 8 単位に増やす**。

意見：多言語多文化接触論は、教員が 2 名とも国際教養学部に移籍したため、今後が心配である。

回答：「多言語多文化接触論」a,b　「多言語多文化接触論演習」a,b,c,d につい

ては、担当教員が国際教養学部に移籍後も文学部での講義を開講してきたが、３年後の今年見直しをすることになっていた。
国際言語文化学コース比較文化論専修として話し合いを続け、千葉大学全体でこの分野を専門とする学生をどのように育てていくかという観点から検討した結果、文学部の講義を残し、以下のような体制で実施していくこととなった。

（１）文学部の科目

多言語多文化接触論 a,b　（a,b を隔年で原則前期に開講）

多言語多文化接触論演習 a,b,c,d

（２）国際教養学部の関連科目（すべてターム制の授業）の履修も可能であり、ガイダンス等でアナウンスする。

多文化接触論（村岡）

現代言語社会論（高）

多文化主義と言語政策（村岡・高　他）

卒論を希望する学生が出た場合には、これまで同様、卒論指導も行う。
学生の所属はこれまでどおり比較文化論専修とし、卒論中間発表・卒論発表も同専修で行う。
　但し、専門内容によっては、学生が希望する専修で発表することも可能である。

【その他】

意見：学部の留学生ともっと交流できる環境があるといい。

回答：留学生歓迎パーティーを前期・後期 2 回実施している。留学生へのチューター制度もあるので、可能であれば参加してほしい。また、コースによっては１年生の入門の授業で、留学生に出身国のことや異文化接触体験、語学の勉強の仕方などについて話してもらい、質疑を受け、交流の機会をつくっているところもある。
学生同士で積極的に交流を深めてほしい。

意見：業料値上げについて
国際人をつくる、との方針での値上げと聞いているが、大学はその方針の実施と結果に責任を持ち、実績を公表してほしい。

回答：本部に伝える。

追記：その後、教員 2 名の補充が決まった（2020 年 4 月赴任予定）

歴史学コース	日本近代史	１名
国際言語文化学コース	比較文化論（ロシア文化・ロシア文学）	１名